



# 「守りたい弱き存在たち」

エプロン通信員 末吉 郁子

いま、児童養護施設に空気がなく、どこもいっぱいらしい。子供たちの入所の理由に一番多いのが家族からの被虐待だという。

私の周りにも親から虐待を受けて育ったという人たちがいて、その中の一人が言った。「私、(親に)ひざに乗せてもらったり、頭なでてもらったこともないんだよ」彼女は幼少の頃から父親の虐待に苦しんだ。言葉でなじられ、毎日殴られ、顔を蹴られる。中学生になるとそれが性的暴力に変わった。「お母さんに言っなよ」とお金を握られた。ある時、勇気を出して母親に助けを求めたが、逆に激怒されたという。そして、別の友人は「いつか親に殺されると思ってた」と。

何年もそんな状態で近隣の住民達はどう思っていたのか。学校や施設など保護してくれる場所はなかったのか。自分の家にいながら安心して眠れない。どんなに泣いても誰も助けてくれない。守られるべき対象なのに、今も苦しんでいる子たちは世の中にどれほどいるのだろう。子供はどんな仕打ちを受けようとも、自分を苦しめ痛めつけるその親から「愛されたい」と強く願っている。

子供は辛いことがあると記憶にフタをし、なかった事にする。空想の中で



記憶をすり換える。そして間違った方法で自分を守ろうとするため、今度は周りを傷つけるようになる。みんな、大人になった今も苦しんでいる。しかし、彼らの親たちもおそらく愛情不足の環境にあったのではないかと思う。子供のみならず、親も一人で悩まずに勇気を持って誰かに相談してみてほしい。

虐待が増加するその背景には、社会への不満、環境汚染、生活の中で人とのつながりを感じられないなど様々な理由が考えられる。誰もが責任を感じてほしいと思う。

子供は親だけで育つものではないはずだから。

### 相談してください

- 家庭児童相談室.....☎893-4411 (内線180)  
相談日:月~金曜日・10時~17時 場所:児童家庭課
- 子どもと親の電話相談室「はごろもホットライン」.....☎896-0038  
相談日:毎週水曜日・10時30分~21時 場所:市社会福祉協議会



## ぐわーゆんたく

58



### 生き残るための闘い

疎開が一九四四(昭和十九)年七月に閣議決定され 沖縄県民の県外への疎開が一段落すると 県内疎開が始まりました 沖縄に駐留する日本軍は 幼老婦女子を開戦時期までに北部へ移す計画を立てました。

宜野湾村では一九四五(昭和二十年)二月頃から北部への疎開が開始されました 疎開希望者たちは村役場の広場に集まり 軍のトラックに荷物とともに乗り込み、

今帰仁村平敷・謝名・崎山へ向かいました 出発を待つトラックからは女性たちのすすり泣く声が聞こえたそうです。一 家離散となり 再会を約束されない辛い別れでした。また 米軍上陸直前に疎開を開始した人は 空襲から逃れるため日中は身を隠し 夜間に歩いて北部を目指しました。

しかし 戦争が始まると 疎開した北部も安全ではありませんでした ある人は疎開途中で戦争に巻き込まれ 南部戦線へ追いやられました また ある人は 疎開者による北部の人口増加によって食糧事情が悪化し 飢餓やマラリアな

どの病気と闘わなければなりませんでした。

戦争体験は人それぞれですが、四五年二月は宜野湾村民にとって戦争の影に怯えていた時期と言えます 米軍が上陸する前から 宜野湾村民の生き残るための闘いは既に始まっていたのかもしれない。



宜野湾村の北部疎開の起点となった宜野湾村役場

「宜野湾市史」への問い合わせ  
教育委員会文化課  
☎八九三―四四三〇